■シリーズ沼津兵学校とその人材 97
幕末の台場築造と小林省三
■史料館からのお知らせ

沼津市明治史料館通信
二〇一八年一〇月
通巻135号

村田丹陵画「伝通院殿刈谷帰城の図」
（稲村直彦氏所蔵・当館保管）

天文13年（1544）、徳川家康の生母於大の方（伝通院）は、実家の兄・刈谷城主水野信元が今川方から離反し、織田方に付いたため、夫松平広忠に離縁された。実家にもどされる際、於大の方は、護衛をしてきた松平家の家臣が兄によって殺害されることを恐れ、途中で彼らを岡崎へ帰した。代わりに付近の農民たちが輿を担ぎ刈谷へ向かった。本図はその場面を描いたもの。於大の方の遺徳を偲ぶため旧幕臣戸川残花らが発起し、明治34年（1901）6月に東京小石川・伝通院で開催された伝通院会に出品されたことがわかっている（『同方会誌』第19号）。同会には元沼津藩主・子爵水野忠敬も賛同しており、その関係で水野家に譲られ、さらに沼津藩士の子だった稲村真里の手に渡ったのではないかと考えられる。沼津藩主水野家は信元や於大の方の弟忠重の子孫にあたる。「大政奉還図」などでも知られる画家村田丹陵（1872～1940）は、田安徳川家家臣の子だった。（樋口雄彦）

シリーズ　沼津兵学校とその人材97

幕末の台場築造と小林省三

沼津兵学校出身者には、明治陸軍において砲兵・工兵の分野に進んだ者が多かった。その中でも、海岸防禦のための要塞・砲台の築造などに携わった者として黒田久孝・村田惇・江間経治・小島好問・渡瀬昌邦・渡部當次・横地重直・渡辺英興らをあげることができる。[1]

しかし、沼津兵学校には、彼らよりも年齢的にはずっと先輩であり、幕末の段階で台場（砲台）の建設に従事した経験を持ったと思われる者がいた。正確には沼津兵学校の所属ではなく、静岡藩立沼津病院で調役組頭をつとめた小林省三である。

京都に派遣されていた歩兵頭藤沢次謙が、江戸の兄桂川甫周に宛てた元治元年（一八六四）三月二四日付書簡の中で、「小林雄蔵、此地ニて海陸御備懸被仰付、□脇治右衛門、其他薩、福両藩之士と同して、摂海砲台築造之事より、平安七箇処之咽喉御守衛之御用ニて、破竹之勢、全く造化之御人撰と感服仕候。同人も随分困閉を極可申、可憐事ニ御座候也[2]」と述べているのが、そのことを示す。「小林雄蔵」が小林祐三（省三の前名）を意味することは、同時期に藤沢が記していた日記の四月二六日条に「辰後小林祐三来訪[3]」とあることからも、ほぼ間違いないだろう。この書簡によれば、小林は京都で「海陸御備懸」に任命され、摂海の砲台築造や京都防衛の要所を固める仕事に多忙を極めているというのである。小林が京都に着いたのは二月四日のことだった。[4]

そもそも小林祐三（前名は八十五郎か、後名は省三）は、戸田隼人正組の与力から、安政三年（一八五六）四月、蕃書調所書物御用出役に抜擢され、万延元年（一八六〇）八月には同所精練方出役になった人である。「製薬などが好で自分の机の脇の火鉢で灰汁を煎詰めてポッタースを製したり[5]」していたといわれ、化学の専門家として知られた。文久三年（一八六三）一二月には御書院番八木但馬守組から御鉄砲玉薬奉行勤方となっており、京都派遣時はその職名だったろう。その後、元治元年一〇月二条御武具奉行勤方から御鉄砲玉薬下奉行・永々御目見以上となり、慶応三年（一八六七）一〇月には大御番格砲兵差図役頭取勤方に転じた。[6]

当時幕府は、攘夷を求める朝廷の意向を受け、摂海や京都の防衛態勢の強化につとめていた。一橋慶喜が禁裏守衛総督・摂海防禦指揮に任命されたのは元治元年三月のことである。大坂・西宮・神戸・堺など沿岸各地で進められた台場築造には、海軍振興のほうが有効であると認識しながらも勝海舟とその門人佐藤政養（与之助）が関与したことがよく知られる。勝の日記には、「京町奉行より、小林祐三帰船便願の事」、「小林祐三来訪。京師無事、諸官皆不平と云う」、「小林祐三、来訪。聞く」、「小林祐三、来る[7]」といった記述があり、この時期両者が親しくし、台場築造についても連携していたのではないかと思わせる。

藤沢の書簡に出てきた「□脇治右衛門」とは、江戸で講武塾を開いた美濃郡上藩士で、幕府に登用され将軍家茂の上洛に随行していた山脇治右衛門（正準・正斎、一八〇九～七一）のことである。山脇は慶応元年（一八六五）五月に小十人格・陸軍奉行支配として幕府に召し抱えられ[8]、後に一橋徳川家の家臣に転じた。勝の日記、元治二年一月二五日条に「昨日、山脇治右衛門来訪」とあることから、やはりこの時期、近畿での台場築造をめぐり往来があったと思われる。

藤沢の書簡には「其他薩、福両藩之士」云々とあり、小林・山脇らが薩摩藩士・福山藩士らとも共同して台場築造に携わっていたとされる。福山藩士は、京都・大坂間の関門築造を担当した安藤織馬のことかもしれない。藤沢書簡には記されていないが、摂海や京坂間の台場築造には京都守護職に任にあった会津藩主松平容保とその家臣たちも大きく関与しており、従事した藩士として神保修理・秋月悌次郎・小室金吾・野村左兵衛・松坂三内・中沢帯刀らの名前が知られる。

一方、藤沢書簡に出てくる薩摩藩士とは、折田年秀（要蔵、一八二五～九七）のことであろう。江戸の昌平黌や蘭学者箕作阮甫に学んだ前歴を持ち、真偽のほどは不明ながら、蝦夷地・樺太を視察したほか、ペリーの浦賀来航時には水夫に化けて米艦に潜入、下田（戸田村？）でのロシア艦修理の際にも鍛工になって工事に加わったとされる。また、元治元年二月、島津久光が朝廷に対し楠木正成を祀る楠公社（後の湊川神社）の創建を建白したのは、折田の建言にもとづくものだった。[9] 同時期、久光は摂海防備の建白も行っており、その結果、同年二月、折田は幕府から「摂海防禦台場築造掛」を命じられ、一〇〇人扶持を給され、大坂土佐堀に居を構え、仕事にあたった。[10] 正式に幕府に召し抱えられたのではなく、先の会津藩士たちと同様、「摂海御造営御用御雇[11]」、つまり臨時雇いといった立場で当該事業に携わったのであろう。二月一七日、折田は同藩の三島通庸・内田政風、会津藩士野村・小室らと二条城の二百畳の間で閣老たちに対し海防論を論じた。[12] 一八日には、久光は折田が作成した図面を二条城に持参し、老中らと協議した。折田の計画は、砲台一四箇

所に九〇万両を費やし、大砲八一〇門を八〇万両で製造・配備するというものだった。[13] 折田は、自らの活躍ぶりを国許の大久保利通らに書き送った。以下が元治元年の二通の書簡である。

【史料1】

三月六日付大久保利通・伊集院平治宛折田要蔵・三島通庸書簡

（前略）爰許天保山并ニ島屋新田礮台之義、明日は精細之図於町奉行所成熟罷成候間、是より直様御取附之旨、今日於木津川口地形見分場所大隅守并ニ主税助より被相達候、尤図形之義者是迄私取調置候図面ニ毛厘も無異議、殊ニ昨年来勝方ニて之取調候図形と暗合仕居候由、其外拾三ケ所何れも砲台之居地勝氏と同論之旨、門人佐藤与之助より細々承知仕候カ旁仕合之至りニ奉存候、附而者右天保山之義、只今不移時日御国より御請取御造築之御願立被為在度好機会と奉存候、爰許之儀者弥兵衛両人ニ而可相成と心配仕候得共何分諸所見分之間ニ無透間、一方より已ニ取掛り申之勢ニ御座候間、夫を押留候も不罷成仕合ニ御座候

一松平肥後守様近々御下坂之由、極内分承知仕申候、尤爰許地形其外陸地之城堡野戦之次第、神保修理、小室金吾并ニ秋月等江も細々示談ニ及候処、深嘆賞罷在候故、右様之訳より肥後守様御下坂御進申上、爰許実地御巡察被為在度との事ニ相聞得申候、殊ニ今晩右小室義急ニ上京仕申候

一今朝未明より木津川口地形見分之上、目標相立晩付相仕舞、随而明日より泉摂堺辺巡察可罷成と奉存候、右者爰許之様子御問合申上度、如斯御座候、以上

三月六日　　折田要蔵

三島弥兵衛

大久保一蔵様

伊集院平治様[14]

【史料2】

五月二十二日付大久保一蔵宛折田要蔵書簡

（前略）御上京御供滞京之間、楠公社并ニ摂海武備之愚見識をも献し候処、是又無遺漏御用被下、殊更於二条城閣老中江之舌戦、武門之面目古今ニ秀、世人一世之大功業を数ケ月間ニ相終候仕合、多者古人ニも恥不申事ニ奉存候（後略）[14]

しかし、折田が幕府から登用され、チヤホヤされていることについては薩摩藩士の間から反発が生じていた。折田は「随分大螺吹きの人」であり、老中らにうまく取り入って、「台場拵への役人を命せられ旗本に召出され大坂に立派なる家を構へ旗本然として居られる」ことを、ちょうど島流しから赦免された西郷隆盛が伝え聞いた。けしからんと怒った西郷は、大坂の折田を訪ね、酔った勢いでケンカに発展、首を絞め懲らしめた一方、折田も西郷の腕に噛みつくなど乱闘騒ぎになったという。[15]

折田年秀のうさん臭さには幕府側でも気付いていたらしく、一橋慶喜の家臣だった渋沢栄一がその内情を探るため、大坂の折田方に入門し、塾生として住み込んだのは元治元年二月二五日から四月上旬までのことだった。渋沢の回想にも、折田は「左までの兵学者でもないが、其頃は大言を吐くことが上手で、其上弁舌に巧みで」あったとされ、二条城に召された際に閣老・有司の前で主張した海防論にも「大法螺」が混じっていただろうとする。大坂の下宿の玄関には紫色の幕を張り、「摂海防禦御台場築造御用掛折田要蔵」の看板を掲げるといったハッタリぶりには、薩摩藩士の間からも反感が沸き起こり、血気盛んな三島通庸らは暴力で制裁を加えたという。一橋家側には、場合によっては折田を召し抱えたいという意図もあったが、潜入した渋沢の報告によりその力量のほどが知れたため採用は中止となった。[16]

小林の名前は、藤沢の書簡以外に近畿の台場築造関係の史料には表れない。[17] 佐藤政養のように最後まで従事することなく、途中で江戸に帰ったからであろうか。そもそも小林は砲術一般よりも化学が得意だったらしい。ただし、山脇治右衛門著『武器茁図』（一八四八年刊、講武塾）の図を担当した「大番与力小林祐猷」が小林と同一人物だとすれば、彼は山脇の門人として兵学を学んでいたことになる。もともと小林は書院番・大番配下の与力だったので、前歴として矛盾はない。ただし、現状では祐猷が省三（祐三）と同一人物であるとは断定できていない。

戊辰時、沼津に移住した小林省三に対し、三人の息子たちは脱走・抗戦を続けた。小林弥三郎（匡順、一八三九～九二）は開成所句読教授出役となり、箱館戦争参加を経て、明治政府出仕後は開拓使御用掛になった。他家を継いだ小笠原賢蔵（？～一八八五、四四歳没）は、中浜万次郎に英学を学んだ後、幕府海軍の軍艦役となり、アメリカ派遣の経験を持ち、榎本脱走艦隊に加わり宮古湾海戦に敗れた後、明治政府では海軍操練所出仕、後年は郵便蒸気船会社船長をつとめた。やはり他家を継いだ横井時庸（一八四六～一九二五）も海軍に入り箱館戦争に参戦、明治海軍では海軍中機関士をつとめた。娘のまさは、沼津在住時に沼津兵学校教授乙骨太郎乙に英学を学び、東京の私塾で教えた。省三は、沼津から上京し開拓使九等出仕などをつとめた後、明治一七年（一八八四）二月二七日、七三歳で亡くなった。

注

(1) 唐澤靖彦「明治期の築城―西日本―」(『歴史と地理』第六八二号、二〇一五年) ほか。
(2) 今泉源吉『蘭学の家桂川の人々 最終篇』(一九六九年、篠崎書林)、二〇六頁。□の箇所は、早稲田大学図書館所蔵の原文書にて補填。
(3)「羈窓日録」(『幕末・維新の相模原』、二〇〇〇年、相模原市立博物館)、九八頁。
(4) 幕臣杉浦梅潭の日記、元治元年二月七日条に「午後小林祐三来ル、去ル四日京着之由」とある(小野正雄監修『杉浦梅潭目付日記』(一九九一年、みずうみ書房)、三〇三頁)。他に杉浦日記には、三月二一日条、四月晦日条にも「祐三来ル」とある(同前、三五三頁、三七二頁)。
(5) 拙著『沼津兵学校の研究』(二〇〇七年、吉川弘文館)、五七二頁。
(6)『近世庶民生活史料藤岡屋日記』第一一・一二・一五巻(一九九二〜九五年、三一書房)、国立公文書館所蔵文書。
(7)「海舟日記」元治元年九月一六日・於神戸、一七日・同前、元治二年三月四日・於江戸、七日・同前(『勝海舟全集』18、一九七二年、勁草書房)。
(8) 慶應義塾図書館編『木村摂津守喜毅日記』(一九七七年、塙書房)、二五五頁。
(9)『湊川神社史 鎮座篇』(一九八七年、湊川神社社務所)、三〇頁。
(10) 神戸市役所編『神戸市史(別録一)』(一九二四年、一九七一年復刻、名著出版)、五二〜五三頁。
(11) 日本史籍協会編『会津藩庁記録』五(一九六九年、東京大学出版会)、一五六頁。
(12) 前掲『杉浦梅潭目付日記』、三二二頁。
(13)『伊達宗城在京日記』(一九七二年、東京大学出版会)、三四六頁。
(14) 国立歴史民俗博物館所蔵・大久保利通関係文書。
(15)「渋谷直武君の来歴附六節」(『史談速記録』第一五一輯、一九〇五年、復刻合本二二、一九七三年、原書房)、二六七〜二六八頁。
(16) 渋沢青渕記念財団竜門社編『渋沢栄一伝資料』第一巻(一九五五年、渋沢栄一伝記資料刊行会)、二九二〜三〇二頁。
(17) たとえば、原剛『幕末海防史の研究』(一九八八年、名著出版)、枚方市立中央図書館市史資料室編『楠葉台場跡(史料編)』(二〇一〇年、枚方市教育委員会他)など。

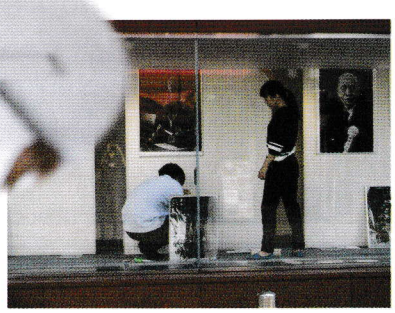
(樋口雄彦)

博物館学芸員実習と館外展示報告

当館では学芸員資格取得を目指す大学生のため、実習生の受け入れをしています。今年も8月21日(火)〜9月1日(土)の期間、4人の大学生が実習をしました。様々な業務実習はもちろん、ぬましんストリートギャラリーでの館蔵資料展の企画から展示までを学生が行いました。

戦争体験を記録する会

館北側の看板設置



＊ぬましんストリートギャラリーの展示は、行きかう人の目を感じながらの緊張感たっぷりの作業です。

館蔵資料展のチラシ

チラシ制作及び展示作業中の写真提供
しんきん地域街づくり・文化・芸術プロデュース
デザイン・企画　都築 透氏

人事異動

4月30日付で事務補助員植松敦子が退職。
5月1日付で事務補助員遠藤恭子が着任しました。今後ともよろしくお願いいたします。

古文書解読入門講座報告

9月の毎週土曜日午前中(全5回)、初心者のための古文書講座を開催しました。今年は24名が受講し、安永7年(1778)に口野村(現在の内浦口野)で出された御仕置五人組帳や浦高札などの地方文書の解読に挑戦しました。くずし字の読み方のほかにも、十干十二支・方位・時刻など暦に関することや、当時の村の様子や暮しなどについても学びました。

沼津市明治史料館通信
第135号
平成30年10月25日
編集・発行　沼津市明治史料館
〒410-0051 沼津市西熊堂372-1
TEL055-923-3335
FAX055-925-3018
印刷　みどり美術印刷株式会社
R70 グリーンマーク 古紙パルプ配合率70%再生紙を使用